

構文論の諸問題

三 上 章

品詞分けは標準の選び方によって幾通りにもなる。モルフオロジイにも技巧的な面があるから、諸説区々となりかねない。そこへ行くと、シンタクスは語法の事実を対象とするものだから、研究が進めばだいたい一致した認識に到達するはずである。もちろん途中の用語が違えば多少不便であるが、共通な構文論を眼ざすことは不可能でない。今や協力が必要であり、またそれが有効なのである。私自身ほとんどシンタクスだけを研究しているのであるが、自力についてはしばしば歎息し、しかし協力ということには希望を持っている。この希望をもって協力のテーマになりそうな具体的な問題を並べてみる。

一、形を重視しよう

皇田保は構文論の打建てに志した一人で、若死が惜しまれる。

その卒業論文(国語国文四 十三年十一月)に次のような概説がある。

……そこで主述関係の有無にこだはらず述語を中心として文や節を考へようとする立場には頗る興味もたれるが、節と節でないものを実際にどう区別するかといふ点になるとやはりなかなか簡単にいかない。例へば、……言主の相手に対する発言態度の丁寧さの用言に於ける現れに注意するのは大

いに意味もあり又有効な一方法でもあるが、それも完全な標準とはいひがたいのである。もともと日本語では定動詞とか陳述動詞とかいったものが形態上区別されないばかりでなく、表現上に於てもいはゆる節の述語などにはさういった性質の乏しい場合が少くない。……ごく大体にいへば接続助詞や吸着語などを下接するものでは陳述動詞的な性質が比較的強く、普通の体言に対する連体語などではごく弱い。

主述関係の有無にこだわってみても始らない(私は主述関係そのものを認めない)ので、述語や述語に準じる活用形を押えて考へて行くより仕方がない。そして陳述動詞的な性質の比較的な強弱を測定して行くより仕方がない。しかし、頭から「形態上区別されない」と諦めてかかってはいけない。

皇田が長大な文の典型的な一例として上げているものを又借りして、言切りの活用形に傍線して示そう。

灘五卿ノ銘酒サへ最上品ハ東京ヘトラレテシマツテ、本場へ残ルノハソノ次キノ品〔ゼロ〕トカイフ話モモク程デ、何ニヨラズ東京ハ最上品ノ集中場デアラウガ、シカシ又東京ヘ行ツテカイロイロニ混合サレルラシイ最上酒ヨリモ、地元ニ残サレタソノ次キノ品ニカハツテ純粹ナ酒ノ味ガアルヤウ

ニ、大阪ニハ大阪ノ美人ガキルニチガヒナイト思フノダガ、ソレナラバトヒラキナホツテ何処ニキマスカト問ヒカヘサレルトコナラガ当惑スル。
 (森田たま一もめん隨筆)

傍線七個のうち三個は引用形式の内部にあるから括弧に入れ、次に「何々スルト」は終止形としてはごく特別な用法だから、これも一往除外する。すると二重線の三個が残り、全体が大きく三段落になる。島田自身も同じ三段落に分けてはいるが、頭から諦めていたためか、肝心な活用形には何ら言及していない。

言切りの活用形、すなわち「何々セヨ」スル「ショウ」「シタ」「シタラウ」の五形を *final* と名づけよう。まずファイナルを押え、それから次々に他の活用形に及んで、センテンスの段落構成を明かにして行くのが順序であろう。

二、係り結びを調べる

我々の文章は、活用形から活用形へ、係っては結び、結んでは係って、大小の段落を作りつついに文末に達する。それで、長短さまざまの文例について、係り結びの様式を調べて行くことが構文論打建ての恐らく唯一の方法だという気がする。

パリパリノ「いんでり」ノ坂西志保ナドガ「米國大使」(中略) : 高松宮ト妃殿下ハ最上ノ候補者テアル。」トイウヨウナコトヲ書イテ、コレヲウチ破ツテ、オカナイトマタ一見識トイウ位ニハ残ツテシマウ。

高松宮夫妻が駐米大使として最適任だなどという坂西の愚見をも、単に愚見として見送ってはいけない。ちゃんと反バク論駁し

(中野重治)

ておかなくてははいけない。という主旨なのであるが、前後関係を切捨ててここだけを文法的に眺めると、「坂西ガ書イテ、(何カヲ)ウチ駁ル」ことになりかねない。中止法「書イテ」が終止形「オカナイ」を飛越してその次の活用形へ係ることは無理だろう。無理でなく合理的な、係り結びの合理的な法則を発見することが我々の仕事である。

係りとしては結びの活用形へどういふ影響を及ぼすかという、その拘束力。結びとしては上のどれどれの係りを自己にまとめるかというその負担力。ある活用形の拘束力と負担力には関連があるが、簡単に比例するとも言えない。くわしくは今後の研究に待たなければならないが、およその見当は立てておく方が便利である。係りとしてはたつきによって単式、軟式、硬式の三式を立てる。命名の次第は拙著「現代語法序説(一八八下)」を参照されたい。

名称	代表的活用	係る力	結ぶ力
単式	中止連用形	無	不定
軟式	仮定形	弱	小
硬式	終止形	強	大

ファイナルの終止形が、結ぶ力はもちろん、接続助詞を得て係りとなっても有力なのは当然であるが、反対にまるで無力なのは「何々シ」「何々シテ」「何々シタリ」の三形である。これらは連用形か連用形の生残りかである。という素性はともかく、現代この三形だけが補語を食止めえない。

格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」などのついた連用補語は動詞を全然拘束し

い。「字ヲ書」は「書ケバ」「書カウ」「書ケ」「書イタ」等何れとも自由に活用する。そしてこれらの活用形によって「字ヲ」の係りは役目を果して堯になる。ところが前記三活用形の場合には、連用補語の係りのはたらきが終にならぬ。

字ヲ書……(ソレヲ)消……

の初の点線の箇所を「イテ」とすると、「字ヲ」は中止形「書イテ」ではまだケリにならず、更に「字ヲ消」を形成するのである。

字ヲ書イタリ消シタリシテ、時間ヲツアシマ

の対格補語「字ヲ」は傍線の活用形へ係り、それから係り抜けて次の活用形「消シタリ」へも及んで行く。このように、補語の通過を許すのが「何々シ」「シテ」「シタリ」の三形である。ただしこれらも「何々シナガラ」「何々シテカラ」「何々シテモ」などとすると、いわば底がはいって、もはや補語を通さなくなる。「煮テモ」焼イテモ「食ヘナイ」の「煮ル」と「焼ク」とは意味上同一の目的物に關係するから、ちょっと底抜けかとも疑われるが、文法的に同じ補語を頂いて「ヲ煮テモ焼イテモ」となる場合はない。

コソナニ骨ノ多イ魚ハ、煮テモ焼イテモ食ヘナイヨ

の傍線語句はいわば副詞化しているのである。

目的ヲ決シテ変更スルナ

の副詞「決シテ」が「目的ヲ」を通すも通さぬもないのと幾分似ているのである。

このように無力な「何々シ」「シテ」「シタリ」と、底ははいってもそれが同じく無力な助詞の類である「何々シナガラ」「シテカラ」などが單式の係りである。結びに対する拘束力はゼロに近い。

新聞ヲ讀ミナガラ飯ヲ食

の結びは「食ヘ」でも「食ハウ」でも「食フ癖」でもよく、全く自由である。軟式の仮定形「何々スレバ」の係りになると、推量で結ばねばならぬという拘束力をあらわす。

しかし結びとしての中止法は、逆に仮定形を背負うことがある。

アア言ヘバカウ言ヒ、コウ言ヘバアア言フ、シヤウノナイ天邪鬼ダ

の「言ヒ」が「言ヘバ」を背負う負担力は、中立的な「言ヒ」が次の自立形「言フ」の遡及によって硬式化することによって生じる。

中止連用形のムウドは次の結びの遡及次第なのである。だから係りとしては無力な單式も、結びとしては他力本願でいろいろと変る大小「不定」である。

終止形と並んで單式の活用形は使用回数が多いものである。だから終止形と中止形との機能の研究には最も力を注がなくてはならない。一例として、「何々スルカラ」と「何々シテ」とは係りとして強弱の両極端にある。それを、「カラ」と「テ」とを接続助詞と呼んで(呼ぶこと自身はまずよいとしても)、そのためにこれらの係り自身をも漠然と一括しておくような形式輕視からは何も生れてこないだろう。私は「シ」「シテ」「シタリ」の三つを一括して中止連用形(將來は中立形)と呼んでいるが、命名まで押売りするつもりはない。この三つが前記の如く共通な性質を持っているという語法事実を承認されたいと考えるものである。

三、中止連用形の規則

第一に、補語を食止めないことを忘れてはならない。特に主格の行衛ははっきりさせておく必要がある。主格の無断交代

田一枚植エテ立去ル柳カナ (芭蕉)

And knocking at the gate, 'twas opened wide (Byron)

の如きは、東西ともに詩人にのみ許される例外的破格として、次に掲げる中止法の結び方はやはり文法違反と見なしたい。

日本トチガツテ、朝鮮テハ、あめりかノ兵隊ガセンセンモテ
ナカツタ。朝鮮ノ女ヲクドコウトシテモ、猛烈ナヒジ鉄砲テ
撃退サレテシマワ。ナオモシツコク追イマワシテイルト村ノ
青年ガオオセイ出テキテ 石ヲ投ゲラレタリ、棒ギレテタタ
カレタリシテサンザンナ目ニアワサレルト、イウ話タイクド
カ聞イタ。(神崎清)

童話ノ方テハ、林(芙美子)サンハズイアン面倒ヲ見テクレ原
稿ノ宛リ方マテ教エテモラッタ。(平林たい子)

第二に、ムウド遡及の原則を守ること。命令や疑問のつもりのない中止法を命令文や疑問文で結んではならない。命令文の誤りはめつたにないが、疑問文へ心変りした誤りはちよいちよいある。欲を言えば、テンスの完了と未了もはっきりさせたいものである。

先日、新聞テ岩波文庫チまいくろふいるむニトツタトイウ記
事ヲ読ミ(ムロン試験用ダロウケレド)、ヤレヤレアンマリ、

モツタイナイコトシナサンナ、ト、遂カニ申シ送ル。(杉捷夫)

これも結びを、たとえば、「申シ送リタクナッタ」というふう
に完了形にすれば、中止法「読ミ」が文法的に「読ンダ」ことにな
るのである。

中止法が乱れる原因の一つは、結びまでが遠くなりすぎること
にある。短文主義を採用してファイナルを多くし、中止したらよい
のである。

第三に、これは文法よりもレトリックの領分にならうが、教育
上は、動詞の中止法は動詞で結ぶことを原則として、形容詞や名
詞で結ぶことは後まわしにすることが望ましい。もっともこの問
題は私の研究も後まわしになっているが。

四、連体形の負担力

連体形は体言へ行止って、他の活用形への係りにはならないか
ら、単軟硬三式のどれでもないわけだが、他の活用形を受ける結
びとしての能力は問題になる。

山田孝雄氏は、連体形を指して「概念を限定して陳述を十分に
あらはさず」とされ、三宅武郎氏は「陳述の意義は、動詞・形容
詞の連体形には全然宿っていない」と言われた由。金田一春彦氏
もそれに賛成しておられる。そんなに微力な連体形なら負担力も
大きくはあるまい、と私も予想したのであったが、この予想は少
し外れかけている。

結びとしての連体形は単式と軟式、合せてアン式を背負う。そこまでは予想通りだが、その上に、硬式の終止形を背負う場合が二つある。一つは並列の「シ」の係りである。

知りモシナイシ、知ラウトモシナイ連中

同じ接続助詞「シ」でも、単なる並列に止どまらず、理由を表す気持がはいれば、むしろ連体法からはみ出る。

今一つは、すでに限定された名詞の修飾語句が逆接の「ガ」や「ケレド」を容れることである。古くは

既定条件 已然形十ドモ

仮定条件

終止形十ト言ヘドモ

の二つの軟式が揃っていたが、現代の提示法「何々シテモ」の意味は後者に近く、前者を引継ぐ軟式がない。そこで、たとえば

ハタラケド^テ深ニナラザル我が菴ラシ

を現代訳すると、つい終止形「ガ」があらわれる。もっともこの「ハタラケド(モ)」は、原文においても連体法の内にあるのか外にあるのか、その辺が少しアイマイである。同様に、あるいはそれ以上に、連体法的逆接には不安定さがあることを指摘しておきたい。

ソレ以来、徐々ニテハアリマスガ、原子力ノ研究ガ続ケラレ
タノデアリマス。

真剣ニ動強スル気ナラ、少々誤植ハアルガ、「方法序説」ノ訳
本チススメルヨ。

などの逆接は、本文から少し外れて、間投的な挿入句をなしている。ところが書名に修飾語をつけて

勉強スル気ナラ、少々誤植ハアルガ、内容ノ深イ「序説」チス
スメルヨ

とすると、間投句が修飾語に引込まれて

少々誤植ハアルガ内容ノ深イ「序説」

という長い連体法を形成する。これを逆に言うと、連体法内の逆接の係りは間投句として横へそれるような傾きを持つのである。

安定させようと思えば、特に逆接連体のおもしろくない非限定名詞の場合には、次の二つの手法のどれかを選ぶべきだろう。

……ソレガ今日描写ノ技術ダケハ持つテキルガ、人生ニ就テ
ハ何ノ考ヘモナク、マタ考ヘタコトモナイトイフ骨ナシ小説
家ノ氾濫ヲ結果シテキルノデス。

(中村光夫「神々の対話」)

ダカラ、政体ヤ体制ハ全然異ツテイルガ人口ダケハ等シイヨ
ウナニツノ国家ハ集合論ノ立場カラハ同一ナノデアル。

(遠山啓「無限と連続」)

ついでに「話」及び類似の名詞の受ける連体法の規則を述べてお
こう。ある語句が話の外題タイトルになっていれば連体法のままでよく、
話の内容を叙述したつもりつもりの語句なら引用式の「トイフ話」とす
る。たとえば

ごるどんガ李鴻章チ遜イマラシタ話ナ説ンダカイ?

はこれでいいが、次の原文のように伸びると、あき括弧のところ
に「トイウ」を入れるべきである。

蘇州ガ降伏シタトキ、ごるどんハ太平洋軍降將ノ生命ヲ保証シ

タニ拘ラズ、李鴻章ガコレヲ驍殺シタノデ、短銃ヲ片手ニ李鴻章ヲ逐イマラシタ（）話ハ有名デアル

（増井経夫「太平天国」）

次の新聞記事も同様な理由で括弧の個所に「トイウ」が欲しい。

すいすノ登山家タチハ、南側カラ取りツイテ頂上ニ達スルル
一トハ、アル種類ノ危険ト困難ヲ冒サネバナラナイガ、今回
ノ経験デ、決シテ登頂ハ不可能デアナイ（）結論ニ達シタ

（大阪朝日新聞）

引用法と言へば、宙ぶらりんの終止連体形尻を、次の指示詞で
締直すという手もよく使われる。いわば連体法と引用法との中間
の形式である。

シカソソレト同時ニ、コノ人生ニトツテ一番大切ナコトハ、
人間ガ大勢集ツテ社会生活ヲシテイル、ソノ中デアドウスレバ
皆ガ仕合せニ暮シテ行ケルカ、言イカエレバ、人間ト人間ト
ノ関係ガウマク調節サレテユクトイウカ、ソワイウモノガ、
人生ニオイトテハ……（湯川秀樹）

まだまだ続くので、かなり歯切れの悪い文章であるが、初の
「シテイル」の宙ぶらりんは、一つの標準的な形式とも言えるの
である。

五、開と閉

主題提示の「何々ハ」は強力で重要な係りである。用言こそ含
んでいないが、一つのムウドとして扱わなくてはならない。

係りとしては最も強力で、ピリオドを越えて次々のセンテンス

にまで係る余力を持っている。主題提示の使命から言っても、あ
っさり消えうせられては都合が悪いのである。川端康成「千羽鶴」
のごく初の部分だけでも次のようなピリオド越えがある。

鎌倉円覚寺ノ境内ニハイツテカラモ、菊治ハ茶会へ行カウカ
行クマイカト迷ツテキタ。時間ニハオクレテキタ。

アザハ左ノ乳房ニ半分カカツテ、水落ノ方ニモヒロガツテキ
タ。掌ホドノ大キサデアル。

父ハ茶ノ間ヘハハイラナカツタ。隣リノ間ニ坐ツタ。

それで主題の余力の打消しに注意しなければならぬ。打消し
の不十分な例として、次は今日出海「官僚」の書出し、

本多誠吾ハ……（四行略）……遂ニ官房ノ課長ニナツタ。

父ガ広島ノ地方裁判所ニ勤メテキル時、脳貧血ノ発作デ倒レ
タ拍手ニ頭ヲ打チ、ソレカラ時々激シイ頭痛ニ襲ハレ、役所
ヲ退官シテシマツタ。

むろん誠吾の父が、退官したのであるが、主格補語「父ガ」が
連体法内にキョクセキしそに微力であるため、主人公「誠吾ハ」
の余力が消え去らず、文法的には父子でしばらく退官を争うよう
な事態になる。

もっとも、ピリオドを越えるのは我が「ハ」だけではない。英
語でも冒頭の時の副詞がパラグラフ全体に及んだり、if-clause
の條件がピリオドを越えてその次のセンテンスにも係ったりする
ことがある。違ふところは、英語の場合は後続のセンテンスが
語主と述語を備えて独立していることである。

また「話ハ違ヒマスガ」「忌憚ナク言フト」「笑ヲ言ヘバ」「笑ハ」

などの前口上の有効範囲も、その直後の一センチンスとは限っていない。ただ違ふところはこれら発言のムウドが主文の外側に立っているのに反し、「何々ハ」は主文の内的構成要素であつて、しかも持続することである。「ハ」はやはり特別である。

主題を提示すると、強い磁力線が場面を縦に貫くように考えられる。各種の活用形が、この磁力線を受入れるか否かで開と閉とに分れる。

全開 中止連用形とファイナル

半開 仮定形(大部分を受入れる)

半閉 連体形(小部分を受入れる)

全閉 引用法、特に直接引用

文例を掲げて検査してみよう。

菊吾ハ、勉強シタカラ、成績ガ上ツタ

菊吾ハ、勉強スレバ、ばすスルダラウ

菊吾ハ、勉強スル時、鉢巻ヲ締めル

菊吾ハ、「勉強スルゾ」ト、決心シタ

語順を変えて、各活用形を上に出してみる。

勉強シタカラ、菊吾ハ成績ガ上ツタ

勉強スレバ、菊吾ハばすスルダラウ

勉強スル時、菊吾ハ鉢巻ヲシメル

「勉強スルゾ」ト、菊吾ハ決心シタ

どれも成立しはするが、多少落ちつきのない悪いがある。後のほど落ちつくだろう。全閉はむしろこの語順の方ががっちりしてしよ。

開閉の様式は語順を変えたり整えたりする場合に必要であり、従つて段落のまつまり方にも関係する。単式、軟式、硬式は開の係り方の名前である。係り結びを調べて段落を明かにするには、閉を括弧の中へ閉じこめておいて後まわしにし、まず開の部分から片づけて行くのである。全開の中止連用形も副詞化すれば少し閉じてくる。語順を変えた方を並べておく。

勉強シテ、菊治ハ成績ヲ上ゲタ

開

煮テモ 焼イテモ、コノ魚ハ食ヘナイ 半開

「ハ」によつて定義した開閉は、しかし「ハ」を取りのけても、無意味にはならない。話手の話線の主流に対する傾きを表すものとして意味を保持するのである。開は話手に対して直接的であり、閉は間接的である。

このように開閉の区別を立てたのは「コレヲ」の問題が動機であつた。いかがわしい本を指して「コレ読ンデモイデスカ？」と訊かれたとする。さてその本を手に取つて、一瞥して不賛成を言表す場合、漢文訓詁調を使うと、

コレハ コレヲ読ンデハイケナイ

と言わなければならない。何故なら「コレヲ」を蛇足するのは上の提示語が代名詞でないからではなく、それに対格表示が欠けている場合の補助手段であつたはずだから。「コレハコレヲ」なんてずいぶん日本語離れしているが、憲法の第六十條以外の約六十個條も語法的にはコレの仲間である。

陸海空軍ノ他ノ戦力ハコレヲ保持シナイ。国ノ交戦権ハ

コレヲ認メナイ。

なるほど、戦力や交戦権は「国民ノ生命ヤ自由ヲ」保持もせず、認めてもくれないんだな、というふうに邪推されるのであるが、邪推にも限度がある。その限度を明かにするために、開や閉が必要になってきたのである。再帰（のつもり）の「コレヲ」の使用規則は次の通り。

提示語「何々ハ」の下で、最初の全開において「コレヲ」を使つてはならない。二ばんめ以後の全開においては使つてもよろしい。全開以外、すなわち半開以下の場合には何時でも使うことができる。ただし使うことが望ましいか否かは別問題である。

六、引用符あべこべ

あるセンテンスを「ト言フ」「ト思フ」で受ける形式を引用法と、いう。単語を受ける上の傍点は引用法ではない。

引用法を直接引用と間接引用とに分ける。直接引用は言った通り、思った通りをそのままに取次ぐ場合である。ただし、簡潔さのために丁寧体を普通体へ下げることは差支えないものとする。つまり「何々デス」「何々シマス」が「何々ダ」「何々スル」に變つて、もとの言葉通りではなくなつていても、それ以外の点に變更がなければ、やはり直接引用の方に入れる。伝達の敬語だけでなく、動作の敬語の「オ行キニナル」「オ貸シスル」が「行ク」「貸ス」に縮まっても差支えないとする。要するに敬語法の変更はすべて直接引用の範囲内と見なすのである。この点が「現代語法序説」ではまだはつきりしていなかったが、敬語法は全体として付加的

他律的ムウドだからである。

間接引用というのは、引用者の引用時の言葉に言直した引用である。言直し方の法則は、ちよつと氣づかれにくいので、実例を引用して説明する。引用符はかりに私が入れたものである。

立チ上ラウトシテ、彼ハ私ノ帽子ヲ落シテシマツタ。低ク太イ声テ謝リナガラ、男ハ帽子ヲ拾ツテ元通り私ノ椅子ノ上ニオイタ。……(五行略)……スルト男ガ顔チアゲテ、微笑シタ。外人ダナ、ト私ハ思ツタ。彼ハ「私ノ帽子ヲ拾ツテヤツタカラニハモウ生涯ノ友ダチダ」ト思ツテキルノニチガヒナカツタ。(フリーマン「神まことを知り給ふ」訳者不明)

ソシテソノ(方紀生先生の)手紙ノ中ニ、「前日武者小路先生ニオ逢ヒシタラ彼ハ私ガ贈ツタ管ノ磚硯ガ非常ニ氣ニ入り「私ニ鉄齋ノ繪チ一枚」ゲタヤイカラ宮崎先生へ持ツテ行ツテイダダク様オ願スル、ソノ繪ハ自分ノ非常ニ愛好スルモノテアルガ、果シテ周君ニモ氣ニ入ルカドウカ」ト云ツテイラレタ」ト書イテアツタ。(周作人)

私の入れた上下の上の方のカギは早速傍線の代名詞などとテイショクするから無理なのであるが引用の初を示すために入れてみたのである。間接引用の規則は次の二個條にまとめられる。

まず代名詞及び代名詞的単語を引用の場合面に合うように變更する。これは間接引用の國際ルウルとも言うべきものだろう。「私」は反射的な「自分」に改める。「昨日」「今日」「明日」は、引用時次第で「ヲトツヒ」「昨日」「今日」とずらしたり「前日」「当日」「翌日」と変えたりする。もつとも今日この方は実行やや困難になつてい

る。引用法の問題以前にこれらの単語の用法が乱れているからである。徳田秋声は「翌日」の代りに「明日」を使う癖があったが、近頃の歴史家の文章にはこの秋声流が非常に多い。

活用形のムウドやテンスは変えない。ただスタイルを丁寧体から普通体へ引下げることが直接引用の場合以上に多くなるが、これとて原文が普通体なら当然そのままなわけであるし、センテンスのカナメにおいては直接引用と違わないことになる。代名詞的単語のうちでも境遇性動詞だけはムウドと因縁づけられているから、もと通りにしておく。たとえば原文が引用者彼の家へ「行ケ」であったものを、引用者私の家へ「来イ」に直すと、命令のムウドがまるで変色してしまふ。だから動詞だけは変えられない。

クルル、下サレ *give for me*
ヤル、(差)上ガレ *give for non-me*

も変えられない動詞である。「私ノ帽子ヲ拾ツテヤツタ」のような呼応外れは間接引用にだけあらわれるものである。

第一條によって直接間接両引用を区別することができるが、第二條によって、肝心な言収めの形式は両引用を通じて同一であることがわかった。下のカギの箇所、言切り、それを「ト」で受けることは形式も、従って性質も同じである。それで、もし直接引用法に上下一対の引用符を施す建前を取るなら、間接引用法においても下のカギだけは挿入しなければならない。そうしないと、文法上首尾一貫しない。ところで直接引用の引用符の問題であるが、引用符のないばかりにまごつかされることが非常に多い。た

とえば

私ハ行カナイ。キツト屠残ルガラウト思フ。

の前に「彼ハ行クダラウカ？」があって、彼の行動が取沙汰されているような場合である。何秒間かは「私ガ行カナイ」のかと誤解させられる。直接引用法にはちゃんと上下一対のカギをつける習慣になることが望ましく、従って間接引用法にも当然下のカギだけ入れなければならないことになる。形を少し小さくし、眼立たない引用符に改めて、どしどし使うことにしたら、というのが私の希望である。

下のカギの独立用法を認めれば、引用符は必ず上下一対のものだという因襲観念はこわれる。この際引用法に対する見方を根本的に改めておくことが必要だと思ふ。まず引用符の開閉をあべこべにするのである。正確に言えばちようどあべこべ(それならやはり一対)ではなく、ほぼあべこべに近くである。前節の開閉、つまり話線の主流に向つての開閉の観念に立つのである。次に新名称を示そう。

上のカギ

閉じカギ

下のカギ (引用句の言切り)
(を強めるし)

締めカギ

ト 開けのト

ト書の「ト」にも符号の役目を兼ねさせて、引用符を一対でなく、(間接引用)組にする。

こうなると西洋文法伝来の直接引用、間接引用という用語が都合になつてくる。話手から見れば、直接引用の方は間接的であつて責任がなく、間接引用の方がまだしも幾分直接的で責任も持

るのである。直接引用をそっくり引用、またはまるまる引用と呼び、間接引用を直し引用とでも呼びかえる必要があるらう。

センテンスを「トイフ」で受ければ引用法だが、命名や定義のよりにセンテンス以前を「トイフ」で受けたものは引用法とは言えない。ところがセンテンスの定義を、難しさを考えて後まわしにしているため、引いて引用法の判定も難しくなる。当分およその判定法で間に合せておくより仕方ないが、多少幸いなことに、開における活用形よりも、引用法の言収めの方が、陳述であるか否かの見当がつきやすい。このことを利用して、逆に引用法のテストからセンテンスの形式的規定に達する道が開けるかも知れない。

七、ルウズなつながり

開の磁場の特性を一つ上げておく。そこではルウズなつながりが可能になることである。また、まるまる引用の内部はそれなりに一つの開であるから、そこにも当てはまる。

名詞は助詞を伴って、動詞は然るべき活用形によって、または接続助詞の助けによって他の語句へつながるといのが原則である。ところがこの原則に反して、裸かの名詞や用言のファイナルそのままが文中に機能することがある。

(運転手の「オ氣ノ毒テスガ、前二三台ツカエテオリマスノデ」を受けて、酔った乗客の曰く) 前ガツカエテルノハ分ツトル。シカシキミ、運転手君、人生、前ガツカエテルカラトイウテ、ジツトシテルワケニハイカン。殺生ヤデ、コノ寒イノ

二。

途中テ道ヲ迷ヒ、日ハ暮レル、腹ハヘル、スツカリ参ツテシマツタ。

福田先生ノコノ訓エハ、実ハ私ダケテハナイ。(このビリ) 数多イ先生ノ門下生ノ心ヲ堅ク結びツケテイル。

そしてこの性質は閉の連体法には全くないか、あってもずっと弱い。もっと簡単な文例を上げてみれば、

アノ本、モウ読ンダ?

私、読ミマシタ

のような助詞省略は始終行われている。しかし連体法では助詞を入れないと落ちつきが悪い。

アノ本ヲモウ読ンダ者

私ノ読ンダ本

開では許される前掲の終止形でも、閉では正しく連用形に戻らない。

(実ハ)私ダケテナク、数多イ先生ノ門下生ノ心ヲ堅ク結びツケテイルコノ訓エ

覺語を初として、似たもの同士を二つ並べると、一つだけでは發揮できぬ副詞的機能をあらわす場合が相当ある。「頭ト言ヒ、腕ト言ヒ」とか「無鉄砲ト言フカ、大胆ト言フカ」とかのはたらくは副詞である。だから「日ハ暮レル、腹ハヘル」と重ねると次へ幾分副詞的に係るので、単に棒つなぎ(paratactic)になっているとは言えないが、それでも連体法へ持込むと、

途中テ道ニ迷ヒ、日ハ暮レル腹ハヘルデ、スツカリ參ツテシ

マツタ時ニ……

というふうに、もっと確かなつなぎを要求しそうである。

このようにルウズなつなかりを許す磁場自身は、反対に緊密なと評すべきかも知れない。連体法の内部は、そこがルウズだから、語句の方で自発的につながつてくれないと困る、ということになるのかも知れない。かも知れないが、でないかも知れないから、簡単のために、ルウズなつなかりを可能にする場所自身をもルウズと呼ぶことにする。全開が最もルウズであり、半開、半閉の順に段々ルウズでなくなり、まるまる引用の内部は再びルウズになる。

ルウズなつなかりの起る原因の一つは尻切れだろう。

コノ論文モ、ドウセ私ノ考ヘタコトダ（カラ）、アチコチ間違

ツテキルダラウ

の括弧内がすり切れてしまふと考えるのである。こゝういふ考え方で説明のつく語法も相当あるように思われる。間違っていないだらう部分について、ご協力を期待する。（五十三年十月）

——大阪府立山本高等学校教諭——